12月20日：燃え上がれ情熱、研ぎ澄ませ集中

◆

これからお見せするのは、俺本人をしてクソコンボ(・・・・・)と認めざるを得ない"シナジー"だ。

「飛べオラァ！」

口から漏れた言葉は鼓舞と罵倒を半々に混ぜたもので。身体全体を使った腕のフルスイングよりも力の籠る脚を使ったシュート。両腕を使うよりも遥かに力強い"突き"が一直線にガル之瀬へと飛ぶ。

「なっ……！？」

まさか暫定竜滅装備を足蹴にするとは思わなかったかガル之瀬よ。だが雑に使ってるんじゃあないし、使い捨ててもいない(・・・・・・・・・)。

勢いよく飛ぶアラドヴァルだが、所詮はいちスキルによる単なる蹴っ飛ばし。あのタワーシールドを貫けるとは考えづらい。そしてそんな予想を肯定するかのようにガル之瀬はタワーシールドでアラドヴァルを弾く。

ガィィィン！！

「！？」

相応の衝撃はあるだろうが、盾と剣がぶつかったにしては異様に甲高い激突音が響く。直進するエネルギーを弾かれ、明後日の方向にクルクル回転しながら飛んでいくアラドヴァル。

「───【翔け刃音(ミストラル)】」

ぼそ、と小さく呟く。ただそれだけで剣は俺に応えてくれる。

僅かに俺のMPが消費され、宙を舞うアラドヴァルの刃が回転を……強める(・・・)。

「お前の倒したドラゴンはサイズ可変だったか？ 俺が倒したやつは………ホーミング飛び道具持ちだったぜ」

「ぐっ！！？」

弾かれた末の、運動エネルギーを空回りさせるだけの回転ではない。明確に勢いを増し、敵を斬り(・・)裂く真竜の羽がガル之瀬の肩を裂いたのだ。

それでもこちらから視線を逸らさず、盾を構えるのは職人芸という他がない。所詮は見てくれだけのダメージとはいえ、後ろから飛んできた刃物が肩に当たってそれでも集中を崩さないのは才覚以上に「慣れ」がなければできない芸当だ。

だが残念だったな。俺の手元へ……否、足元に戻ってくるアラドヴァルに対して俺が蹴りの構えを見せた瞬間、ガル之瀬はこのクソコンボが何たるかを理解したらしく表情を強張らせる。

「冗談だろ……！？」

「仕様でぇぇぇす！」

【翔け刃音(ミストラル)】はトマホークの力を宿したアラドヴァルの特殊魔法。投擲されることを条件に要するが、MPを消費することで激しい回転を伴って「敵を狙いつつ」投げた"部位"に戻ってくる。

アラドヴァルは激しく回転しているが、必ず刃を敵に向けた状態で投げた部位……すなわち足元に戻ってくる。俺はそのタイミングで再び蹴武で蹴っ飛ばせばいい。

そして、これを止める方法はただ一つ……奇しくも文字通りの意味に。

刃を、脚力をもって射出されるアラドヴァルを避けず弾かず受けて止めるしかない。でなければ、俺はMPとスキルの続く限り蹴武でアラドヴァルを射出し続ける。

ちなみにスキルリキャストは「愚者」の力で半減しているし、アラドヴァルが戻ってくる間にMP回復ポーションの一気飲みは容易い。金ならいつでも稼げる。これぞ有限ループ連撃「お前で壁打ち」！

余談だがリボルバー・キックショットは一回の発動で効果持続中は六回まで蹴りにダメージ補正が付与される。本来は蹴るものを六個用意する前提なんだろうが……五回手元に戻せば武器は一本で事足りるってわけよ！

「さぁどうするビッグシールド！背中にも盾を背負うか？！」

口では有利に立った素振りを、しかし頭の中では既に「お前で壁打ち」が破綻している事を認識している。なぜなら───

「……【励磁の摂理(ラピュータ)】！」

アレ(・・)だ。ガチン、と音を立ててアラドヴァルがガル之瀬の盾に張り付く。弾かれなければ【翔け刃音】は使えない。

磁力に反応する金属に対する絶対的優位、少なくとも俺の握力では思いっきり踏ん張って両手で剥がす、とかしない限りはあれに抗えない。だがそれでも……ああそうだろうガル之瀬、お前も顰めっ面を浮かべたくもなるだろう。

もしその磁力技がもっと手軽に出せるなら、お前はそこまで受けに回らなかったはず。リキャストか、コストか。いずれにせよ連発ができないんだろう。

そこを狙う！ 二刀流は武器が二つ、じゃあない。選択肢を二つ並行して扱うことにある！

故にその手には皇金剣、回収者をアラドヴァルに向けながら一気に距離を詰め───

「【賢馬の摂理(フウイヌム)】！！」

「うぐお！？」

反応できたのは、この戦いの中で何度も一杯食わされたからか。何度も食わされてたらもうそりゃわんこそばだろと思わなくもないが……決めるところで決められるなら過程で何度失敗したっていいのさ。

とにかく、ガル之瀬が予備動作も無しに高速で突っ込んできたのに対応できたのはガル之瀬というプレイヤーの性能がまだ底を見せていないだろうと警戒していたからこそで、しかし右手に掠ったのはまだガル之瀬というプレイヤーの性能の”底”を見誤っているから、だ。

武器と盾、アレが揃っている限り一撃で俺を屠る事ができる。それくらいの警戒で詰めていく。

もはや受けに回るだけではジリ貧と判断したのか、これまでにない積極的な攻めに転じたガル之瀬がこちらに距離を詰めてくる。

大振りな振り下ろし。バックステップだけで回避は容易いがそれは最悪手。弾くのは次善だが悪手(・・・・・・)。避けるなら横しかない。

「【小人の尺度(ブロブディンナグ)】！

一瞬前まで俺のいた場所に、巨大化したメイスが叩きつけられる。後ろに下がっていれば伸びた射程に潰されていただろう。

だから横、ガル之瀬がタワーシールドを持つ手とは逆の側面に回り込みながら皇金剣を振る。

「そのサイズは不相応じゃねーかぁ！？」

「どうかな……！【巨人の尺度(リリパット)】！！」

縮むメイス、片手で扱えるサイズまで小さくなったメイスのグリップでガル之瀬は皇金剣を受け止めた。無論、そんな無理な体勢の防御を貫けないほどヌルい攻撃力ではないが、それでも僅かに威力が弱まれば奴は鎧で受けることができる。

「っ！」

メイスにスキルエフェクト、強化ならまだマシだが……攻撃スキルかっ！

「おおお！！」

今度はお前が防御に回る番だ、と言わんばかりに盾代わりに構えた皇金剣に、咆哮を上げるガル之瀬のメイスが激突する。

受けて止めるのは無理だ、故に受けてそのまま飛ばされることを選ぶ。目減りするHPに視線を向けながらも、俺は大きく口をすぼめる。

「ヒュ───」

晴天流「蒼穹」。恐るべき竜顎を声音が擦ればマッチの如く火を点ける。

含み針を吹くように、光熱の線が奴へと直進していくのを視界から外しながら、受け身をとって着地する。

「楽し過ぎて腹立ってくるぜオイ」

「……次があるならさっさとリスポンして対策装備で固めたいくらいには、こっちの台詞だ(・・・・・・・)」

回収者でアラドヴァルを手元に引き寄せながら、完全不意打ちの蒼穹をしっかりと盾で防ぎ切っているガル之瀬の姿。その完璧な対処にそろそろ青筋を浮かべたくなるほどの感情を込めて俺は笑みを作った。

蹴り飛ばす→お前に当たって衝撃充填→回転力を増しつつ戻ってくる→蹴り飛ばす（以降ループ）

実際は高速で飛んでくる剣がピッタリその場に止まって浮遊力を失う瞬間にタイミングを合わせて蹴り飛ばす、というのは難易度が高いのだがサンラクは思考加速でその問題を軽減している。

特技：消音(ミュート)で音ゲークリア可能、という宴会芸みたいな特技が過去最高に輝いている。

竜滅装備は

・元々の武器のスキル

・竜滅装備として追加された能力（元々の能力を変質させる場合もある）

・ジョブとセット運用時のみ使える能力

・解放状態時のみ使える能力

【翔け刃音(ミストラル)】は三つ目に該当するが、アラドヴァルはジョブ連携という前提条件を踏み倒している。

・【賢馬の摂理(フウイヌム)】

超高速で駆け抜けるシールドバッシュ。盾そのものが推進力を経て突っ込んでくるため、どんな体勢だろうがしっかり持って構えていれば盾が使い手を引きずりながら突撃する。